

姉：創作

著者	朽葉，幹生
雑誌名	龍南
巻	2 1 7
ページ	2 8 - 4 8
発行年	1931-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2298/7011

姉

朽葉幹生

(一)

赤土のどろ／＼した鈍い光の峠にかかった。

喘息持ちのやうに、喘ぎ／＼悲鳴をあげて、滑りの悪いピストンをガツ／＼鳴らして汽車の子が走り續けた。赤い山腹が長い列をなして雨の中を薄氣味悪く走つたり、歩いたりした。小篠と羊齒の青黒い葉が、黄色く染められた芝草と共に同じ速度を保ちながらついて來た。汽車の子の速度が馬鹿に緩んで來た。歩いてゐるやうだつた。雨の音と汽車の音が重り合つて鈍重なその癖氣ぜはしい叫びが瘴癘的に赤土の山腹へ響いた。

窓外の空模様は段々險惡になつた。赤腹の上空に先刻迄疎らに眺められた雨の絲が急に數を揃へて、限られた空濤を灰色に雪で充たして終つた。光が段々薄れて荒涼な窓外の景色が壓倒的に迫つて來るやうにも思へた。凄じい雨が連續して降つて來た。

松の林が見られた。點滴の球で玻璃扉は朦然と煙つて窓外はかすんでゐた。松の幹らしい細長い棒が同じ所に停止してゐるやうだつた。何十本かの幹が一個の玻璃扉に集められて動かなかつた。

突然ガンと強動して汽車の子は剽輕な悲鳴をあげて完全に停止した。

暗くなつた車室の中でぼやけた人の顔が俄然移動した。騒がしくなつた。

「どうしたのです。驛でもないらしいが。」

細い稿の着物を着た商人風体の男であつた。

「山の眞中で停止と言ふんですな」

氣を腐らしたやうに小學教員が説明した。彼は胡坐を搖いて「尋五の教育」と云ふ雑誌を度の強い眼鏡で讀んでゐた。頁をめくつてゐた。

「故障でも出來たんですな」

「左様」

「汽罐でも破れたと言ふのでせうか。」

「さうですな、大体、あなた、この輕便と云ふ奴は日清戰爭頃に出來た老ぼれでね、之を三四年前から此處へ敷いたのですが此奴骨董品でね、鐵道省もいい加減な事をやりますわい。」

小學教員は汽車の子の精密な歴史を始めた。

「成程いい加減なものでね」

「この雨の中に、本線同様ちやんと一人前錢出して乗つといて、立往生されては堪りません」

汽車の子は再び悲鳴をあげた。このまゝ一步も進めぬと泣いてゐるかのやうに、

「こんな雨の降る日に、嫌と云ふのに、あなたが無理に發つからです」

「まさか、こんな風になるとは思はんから」

隣りでは若夫婦が喧嘩とも睦言ともつかぬ事を始めた。

「車掌は居ないのですかね、一寸訊いて見る。」

商人風の男は堪りかねて立ち上つた。

雨が一段と活氣をそへて來たと反對に四邊の先は全く消沈して行つた。赤い山腹がにやけた笑ひを續けゐた。だが、それも忍

びよる夜の闇に直ぐ捲き込まれてしまふのだ。

「御迷惑ですが、雨でレールが濡れて坂が越せません。車室を出て降りたり等しないで下さい。後へ戻つて、だ力をつけても一度發りますので」

「この雨に外へ出るもんがあるか。兎に角早うして貰はんと困る。日が短かいんだ。」

羅紗の道行を見た男はぶん／＼怒つてゐた。

赤い腕輪の車掌はピョ／＼お叩頭をして廻つた。恰も自分の責任でもあるかのやうに――
纏て汽車の子は逆戻りを始めた。馬鹿に早かつた。

「曖昧なものですな」

商人風の男は座についた。

「ですが、これは又急行列車のやうですね、坂と云つても傾斜はわづかですかね。」

小學教員は又例の如く「尋五の教育」をめくり廻してゐた。丁度洋燈が申し譯みたいについてゐた。

玻璃扉に宿つた雨滴が白い絲を引いて流れた、黝ずんだ坂の小徑がうね／＼と泥沼のやうに流れるのが見えた。玻璃扉に頬を當てて涼い觸感を物憂く啜りながら、私は茫然と麥稈帽子の汚點を凝視めてゐた。

「二三日旅行して來ます。」

疑つてゐる母の眼を氣の毒に思ひながら

「心配しないで下さい、家においても退屈で困るから……」

「だつて身体もまだはつきりしなのに。」

「神經衰弱つて病氣はじつとしてゐても良くなりません。」

「お前清子の所へ行く氣でせう。」

「うん……」

「山口へ行くのなら止して……お父様に解ると悪いから。」

「お母さんは姉さんが可愛いいんではありませんか。お父さんだつて意地なんです、あれは頑固と云ふものです。」

「然し悪いよ。」

「姉さんは可憐さうです。あなただつて飛んで行きたいでせう。解つてゐます、本當の母親が子が可愛くない譯がありません。」

赧い顔をして母は涙ぐんでゐた。

「佯つて……世間の眼を佯つてゐるのです。腹の中で可愛くて可愛くてならない癖、表面怒つてゐるんです。そんなに泣いて世間に媚びる必要があるものでせうか、そんな卑しい妥協や調和なんかどうでもいい。愛してゐて憎むなんて……」

「愛すればこそです……」

「莫伽な……そんな事が信じられるのですか。自分を偽つてゐるのです。人を欺いてゐるのです、不自然な事だ。それで世間と協調して行くなんて、それは迷信だ。間違つてゐてそれを知らない。去勢を張つて涙をのんでゐる。愛して憎んでゐる。矛盾だ、そう思ひませんか？」

「清子は我儘すぎます。親の事も考へて呉れてよさうなものです。」

「あなたのおつしやるのは親でなくて僕なんだ、そうです。何故阿母さんは僕に氣兼ねしますか、何故本當の子と思つて呉れません？姉さんを愛してゐて何故愛してなどしてゐない風をなさるのです。それで僕が喜んでゐると思ひますか？」

「清子とあなたと」にはなりません

「それが迷信なんです。姉さんも僕もお父さんの子に違ひないんだもの。」

「云つて下さいますな。私は責められるやうです。」

「何故？」

母の額に黴い汗が絶望的に流れた。

「お母さん、あなた迄がそんな氣でゐるのですか？ 本當の親でなくとも構はないぢやありませんか？、僕はあなたを本當のお母さんと考へてゐるのです、あなたも私を……」

「容して下さい 清子は……」

隣室で父の喘ぎ續ける苦しい咳が聞えた。

「姉さんが……？」

「訊かないで……」

母は必死になつて、それだけを云つた。

「父は病身です、僕が父を意識出来る時は、最う父は病身だつたのです。母も同じ病ひだつたのです、それで死にました。成程あなたは僕には繼母です。然し父はあなたの力で今迄生きて來ました。僕だつてそうだつた。僕にはあなたをおいて親と云ふものがないも同然だつた。僕はあなたを本當の母と思つてゐる——思つて來ました。そして姉さんは——例へ好き勝手な事をして家出をしたからとは云へ——矢張僕のたつた一人の姉に間違ひはありません。

僕は淋しいのです。親の血を受けてか身体も弱い、然し僕は努力してゐます。懸命です。解つて下さるでせうね？」

母は打つ伏してゐた。突然顔をあげて何事か云ひ出さうとするかのやうに唇を震はした。

「私は欺いてゐたのです……あなたとあなたのお父さんを……」

父の苦しい咳が再び聞えた。

私の神経は瞬間緊張した。だが母の云つてゐる事が良く解らなかつた。涙ぐんだ母の眼に悲慘な輝があつた。

「清子は……」

然し母は何を思ひ出してか突如口を噤んで何も云はなかつた。

「姉さんは惨め過ぎます。子供が生れても直ぐ云つて寄こすことさへも躊躇してゐます。氣兼ねてゐます。一月以上も立つてやつと内證に知らして寄越す姉さんを察して下さい。僕は曾ひに行きます。構ひません。僕のたつた一人の姉と初めての姪だもの。あなただつて飛んで行きたいんだ。僕とか世間の人なんかは何故恐々と氣兼ねなさるのです。今更義理人情もありますまいお芝居ぢやない、實際の事なんだから。あなたは成程、僕に何か隠してゐらつしやる、歎いてゐるとあなたは云つてますが、何故はつきり云つて下さらないのです。」

「責めないで〜。」

私の追憶は破れた。汽車の子が突然金切聲をあげたのだ。

汽車の子は何時の間にか無事に峠を越して平原とは名ばかりで山と山の狭谷を先刻の遅刻の辯解とでも云つた風に快速力で走つてゐた、そして寒村の驛に近づいた事を誇らしげに報じたのだ。赤い火の子がシュツ〜と音をたてて消えて行つた。青いシグナルの手が重く垂れてゐるのが見えた。

空想と退屈と夜の憂鬱と感傷をのせて汽車の子は走つてゐた——朦朧たる事實から受ける此の感じが、深い夢の世界から突然目覺めた私に瞬間の氣拙さを與へた。

雨は何時の間にか小降りになつたらしく、玻璃窓の點滴が流れ落ちてしまつて四角な平面全体が真白い霧のやうに夜氣に凝固つてゐた。私の倚りかかつてゐた頭の部分だけを残して……それを通して、狭い街道、貧しい電燈、傾きかかつた藁屋根の軒の行燈、街道を走る幌の一頭立ての馬車が見えた。杉と柵の長い列が見えた。

汽車の子は幾つかのレールを繼々に踏みかへて廣くもないプラットフォームに着いた。

(二)

靄とも夜の色とも片附かないものの中にぼんやりと驛が描き出されて淡い構内の電燈が夢のやうに瞬いてゐた。赤ら顔の驛夫に切符を手渡ししてゐると構目の細いセルを着た小柄な女が構内の夕、キを小走りに歩いて來た。——姉だつた。瞬間、私は熱いものが胸に込み上げて來るのを感じて眼をそらして、下に置いてあつたトランクを急いで手に取らうとすると、

「まあ／＼好く……」

斯ふ云つて這入つて來た姉は、

「私に……」

と云つて無理にトランクを手にとつた。姉は涙ぐんでゐた。私等二人は暫く互に視線を交すのも言葉をかけるのも極り悪いやうな思ひがした。

「私、あなたに本統に會はせる顔がない、それでもなんだか斯うして來て呉れると嬉しい……」
萎れて青い顔をしてゐる姉の頭に小さな雷が淋しく乗つかつてゐた。

「退屈だつたものでね……」

「えゝ、私電報を受け取つた時どんなに嬉し泣きに泣いたか知れない……」

「兄さんは……？」

「來てゐるの、馬車屋で用意して……」

姉は眞赤な顔をした。私の不用意の中に云つた兄さんと云ふ言葉が二人に變妙な響きを與へた。

「しばらく待つてね。すぐだから……」

私はエヤシツプを取り出して吸つた。

薄らいで行く煙の向ふに構内前の居酒屋の軒燈が寂しく霧の中に揺れてゐた。しんみりと夜氣が脊に這寄つて來て山の初秋の靜かな氣配を物悲しく煙で吸つた。

「姉さんは幸福でしたか……？」

「えゝお蔭で……」

筋肉の弛んだ口尻に小さな皺を見せて姉は微笑んで見せた。

「結構ですね」

私は不知不識の内に二人が殊更に他人めいた口のきき方をするのを淋しく思つた。何とはなしに二人の間には遠い隔が出來てゐるやうにも思へた。「莫迦な〜！」と心で打消してみた。

「赤ちゃんは何？」

「まだ小さいの、寢附きが惡くて、お乳が足らなくて弱々してる……、そして神經質よ。」

姉の顔は盪んでゐた、おくれ毛が長く剃刀を當てないらしい襟足に縮れてそよいでゐた。

「僕は姉さんの子供に會ひに來たんです。」

「そう、有難う……」

何處かに隠し切れぬ淋しさがあつた。光澤のない髪、褪せた頬の色、寢起きの後の腫れぼつたい眼尻、筋力の緩んだ口尻に慘めにも老ひ込んで行く姉の暗い影を見たやうな氣がした。

「お父様もお母さんも御元氣でせうね」

「争はれないもんで段々老ひ込んで行く」

「さうでせうね」

物悲しい暗い壓迫が姉の心を捕へたらしい。

「濟まなう」

聞きとれぬ程の小さな姉の聲に、私の神経は尖つてゐた。

——矢張幸福ではなかつたのだ——

車の用意が出来て、私と姉と姉の夫とは五分心のランプのほの暗い光の中に別々な思ひを荷つて坐つてゐた。

「本當に好く、こんな所へ……」

姉の夫は恐縮したやうな顔をして何邊も繰返して云つた。

「御身体は？」

「弱いので困つてゐます。今年も又休學してゐるんです。だから此所へも來れました」

「矢張り……？」

「そうでせう、遺傳ですね、姉さんだけは幸福に免れてゐますから……不思議なものですね」

馬車は新しく敷かれた砂利の凹凸路を上下左右に容赦なく揺れた。

「神経衰弱と思つてゐたが、矢張違つてゐるやうです。醫者なんて本當の事は仲々云ひません。」

姉の顔に苦しさうな眸が見られた。先刻から黙り込んでゐた姉は五分心のランプの焰ばかりを凝視してゐた。何か考へてゐるやうだつた。

「珍らしく二三日雨が降りますね。夏には雨乞ひ迄した位でしたが……」

「雨乞ひを……」

「此處ではね、太鼓を叩いて踊るんですよ。輪を作つてね、真中の男が『雨貫はうく』と音度を取る。すると輪の男がそれにつけて『雨貫はうく』と調子を合せて行くんでしてね。一月程前迄位はやつてゐました。」

「あなたも。」

「え。」

「不景氣だと云ふのに日旱では困りますからね……するとあなたは百姓にもなると云ふ譯ですね。」

「そうです。」

「本も讀む、繪も描く、百姓もやる、釣もする、獵もやる」と云ふ譯ですね。」

「あなたを釣りに御案内しようと清子と話した事でした。」

「つれますか。」

「黒鯛がつれて面白いのです。一寸沖へ出ますがね。」

馬車は霧の中を單調に走つて行つた。平凡に話しが續いた。海の近くへ來たらしく荒れてゐるらしい潮鳴の音が松風に和して異様に響いて來た。一日中搖られ通しで私の感覺はぼやけてゐた、それでも潮鳴りのどんざーんと云ふ音は何となしに心を無理にも緊張させるのだつた。

山の際に平べつたく立ち並んだ此の界限での舊家が三四軒あつた。姉の夫の家はその一番奥まつた處にあつて頑丈な石の垣が築かれて嚴肅な門が赤土で埋つち上げられてゐた。庭には芭蕉の葉が大様な揺れをして夕顔の花が雨に濡れたまゝ匂つてゐた。庭から山際迄密柑が植ゑてあつて闇の光に小さな林のやうに廣々として暗い静けさを保つてゐた。納屋があつて赤いランプの下で小作男共が夜食をしてゐたが皆「ようおいでやした」と云つて丁寧に私を迎へた。

夕飯には例の黒鯛とやらが出て、西瓜だの眞桑瓜だの姉の夫は親切に奨めた。赤ん坊は折悪く眠つてゐてその夜は見ずにしまつた。

夕飯が済むと「疲れただらう」と云ふので姉夫婦にすゝめられ姉に案内されて早くから床には入つた。

四疊半の部屋の一方が庭に面してゐて密柑の騒々しい葉音を聞いた。一方は白い壁で大きな蜘蛛が死んで乾びて掛つてゐた。他の一方は奥に通じてゐた。電燈に蛾がたかつてビビと泣いて寝つかれなかつた。時折赤ん兒の泣聲も聞えて來た。あやしてゐるらしい姉の聲が妙に頭にのめり込んで來た。睡眠と疲勞とが高ぶつた神經と久しい間抗争した。ずつと遠くで又潮鳴りを聞いた。

(三)

顔を洗ひに行くと、井戸端の溜池に水蓮の花が二つぼつかりと浮かんでゐた。魅を知らない處女の水浴にも等しい清淨な姿だつた。裏木戸の門がことりと音を立てて薪を手にした姉の姿が見られた。

「眠れた?。」

「うん。」

「藪蚊のゐて困つたでせう……。」

垣の木棚に山が斷ち切れて小さい小徑が繁みに沿つて走つてゐた。山の姿を寫した水で揚枝をつかつて顔を洗つてゐると、赤ん坊の泣き聲がした。

「目を覺したわ。昨夜あんた困つたでせう?。」

「疲れてゐたから知らなかつた。」

姉は臺所から消え去つた。しばらくして赤ん坊を抱いて姉が現れた。赤い布圍にくるまつた姪は黒い瞳を私の鼻の穴―そう思つた―にむけて不思議な私と云ふ存在物を見てゐた。

「一寸抱いて、私、いそがしなのよ。」

「人見しりして泣きやしない?。」

「動かしてゐればいいの、靜にしてゐる事が嫌ひよ、この子は。」

赤ん坊を抱いて私は裏木戸から山の小徑の方を歩いた。左右に緩く揺つてゐると姪は欠伸をして飲み足りた腹をふく／＼さしな。

じつと姪の顔を見てゐると無精と可愛いかつた。唇に接吻した。乳臭い一種の酸ばい味たつた。姉の乳房でも銜へた様な氣がしてハツと思つて四邊を見廻した。空差しい思だつた。——然し一寸も俺に似てゐないぞ——

斯う思つて姪の顔を舐めるやうに見廻した。

姪は顔を擧めて私を見返した。

——生意氣な——

と瞬間、私は私の顔と姉の顔が全く違つてゐるのを思ひ出した。

——腹違ひでも、何處かに類似點があるものだ——

斯な事を考へてゐると急に私は淺間しくなつた。——面倒臭い、用事のない事だ、いけない事だ、——心の中で辨解してもみた。

——阿母さんに見せたら喜ぶだらうに——

迂廻して思惑して見たが猶結果は悪かつた。

「清子の所へは行かないで」:

色んな事を隠してゐるらしい母が泣き出しさうに懇願した事が、纏れて繰出されて來た。それは私の知りたがつてゐる事で、恐ろしい事だつた。

「莫伽な、く」

壊れかけた玩具の汽車のやうに歩き廻つて、行き惑つてゐる時

「御飯よ！」

姉が迎へに來た。

(四)

山へ登つたり濱へ行つたりして、空虚な四五日が過ぎ去つた。

濱では色の黒い海女達が湯巻き一つで雲丹を搦つてゐた。濱の子供等は醜く汚れてゐて淫な歌を歌つてゐた。喧嘩もした。漁夫共は朝鮮人が沖で密漁をやつたとかで姦しく奴鳴り散らして夜警の舟の用意をしてゐた。彼等の中には秋から冬にかけて漁師を廢業して山で炭焼を、する者もゐるさうだつた。

時折甲山岬から浦鹽須徳行きの汽船が白い水平線に見られた。海流をさけて迂遠な廻航をしてゐる石油船だの、薪炭船だの、ウエークが銀蛇のやうに秋の海に輝り映える時もあつた。鰯、鯖を主とする漁船が夕焼雲の中から威勢よく夕の風に送られて歸つて來ると村は兎に角に景氣がよいのだ。

山では杉だの樺だの栗だのが疎雑な緑と青と黄の色の色彩をして、山籬の小道に白桔梗の花が寂しく咲いてゐた。麓の繁みに薄が秋を手持ぶたさになよ／＼と身を踊らしてゐた。青い日の光を集めた木の間の徑は枯葉で歩く毎にキュン／＼音を立て、濕れた團栗の實が急速に蹣け飛んで行つた。藪蚊と山蟻が恐ろしく多かつた。柴捨ひの婆や娘等が時々猜疑の眸をむけて私を見送つてゐる事があつた。

磯森山では炭焼の煙が終日山を籠めてゐた。

或る夜の事だつた。

姉の夫は山の木を切出す準備の爲、濱の町へ出掛けてゐた。初めて私は姉と二人切りになつて話す事が出來た。

「あの人も變つたでせう。」

「すっかり世俗じみて來ましたね。」

「親がなくなると直ぐあれで、始めて握つた財産の事で夢中なんだから……」

中學校教諭をしてゐた姉の夫は母の死と共に、此の山里で百姓となつたのだつた

「此所では姉さんも一寸寂しいでせう。」

「さうね。」

曖昧に微笑んで見せた姉だつた。

「姉さんもあんな事で何ですが、思ひ切つて家へ一邊歸つて見たら……」

「え……」

「自分で後めたく思ふ必要なんか少しもない、と僕は思つてゐるんだから、……姉さんも氣兼ねなかなさらくとも良いぢやありませんか。」

「そうね……」

「阿母さんは勿論の事、お父さんだつて心の中では、ゆるしてゐますよ。それに近頃は丸つ切り老い込んで了つたし……」

「俊子さんは？」

姉は話を脱線させた。然も眞白目過ぎた。

「俊子は相渝らず來ます。」

「綺麗になつて？」

「相渝らず呆つとしてる。」

「だつて、あの人は綺麗だつた。」

姉

「綺麗だが氣がきかないので引立たない。」

「正直でいいわ。あんたには丁度良いと思ふわ。」

「笑談でせう。平凡過ぎて嫌だ。」

「でも全く嫌でもないでせう？」

「解らない。」

「誤魔化してゐるわ。」

姉に見詰められると私は云ひやうのない困惑を感じた。それにもう一つ悪い事には攻めかけて来る姉には意外な若さがあつた

——かう云ふ點では昔と一寸も變つてゐない——

そう思ふと私は急に嬉しくなつた。だがその瞬間姉の笑顔に私自身の顔を感じた。何物かに打ちのめされた感じだつた。

——一寸も似てゐない——

「何を見てゐるの、嫌だ……」

「不思議だ。俊子と僕は従兄妹で似た處があるのに、姉さんの顔と僕の顔は丸で赤の他人だ。」

姉の顔に若痛とも眞理を否定しやうと云ふ藻掻ともつかぬ暗い動きがあつた。何だか見た。私はもう饒舌る根氣がなくなつたかのやうな氣がした。

「六つかしい事を考へてゐるのね、」

「さうです。僕は赤ん坊を抱いた時もさう思つた。——一寸も似てない——と。」

「似てゐなけやいけな？」

恐らく姉の最大の反駁はそこ迄と思つた。

「猫の子だつて親子兄弟は似てゐる。」

私はもう駄目だつた。行く所迄行き盡さないではゐられぬ氣持だつた。悔恨を求めると云ふ戦法が私を強暴にした。

「馬鹿々々しいわ。」

姉には案外な張りがあつた。

「云つて下さい、本當の事を、阿母さんは：」

「阿母さんが：」

——此處だ——と思つて

「阿母さんは云つた。」

「何を。」

眞實になつて姉は周章てた。そして否定した。

「偽です。」

「何が……」

「阿母さんの云つた事。」

「何故、偽です。」

「偽だから偽です。」

「僕は偽でない方がいいと思ふ。」

「あんたは意地悪だわ。」

「僕はどんなに意地悪でも構はない。」

「何故、私を苦しめるの？」

「僕は自分を誣つておれない。僕は苦しんでいる！」

姉

「姉さんは逃げてゐる。だが僕が可哀さうと思ふなら云つて！」

「……」

「何故、本當の事が云へないのです。僕は此の事を放つておけない。學校も休んでゐる。僕は眞剣に悩んでゐる。何故本當の事が云へないのです。お願いだから云つて下さい。」

「勘忍して。」

「ぢや本當ですね。」

「えい。」

姉は爆發的に身を痙攣的に震はせ齒をがち／＼と鳴らした。そして泣いた。

「矢張り本當の姉弟でなかつたのだ。」

失望とも諦めともつかぬ氣持だつた。

同時に淋しい、恐らくは何の抵抗もなく運命のまゝに翻弄されて遮一無二に生きて行く母の姿が思ひ出された。

「阿母さんを憎まないで——」

「解つてゐます。」

崩れかかつた膝の上で震へてゐる姉の下顎を、私は呆然と凝視めてゐた。

「阿母さんは弱かつたのです。淋し過ぎたのです。私だつて……」

口籠つた姉の眼に何物かを許へるやうな力一杯の強さがあつた。

「私はとうから知つてゐた、でも私はあんたに云へなかつた。私はあんたが好き……だつた。」

射すやうに私は眼を多ぐられて喘いだ。

「堪へられるだけ堪へてみたの、でも弱かつたの、私は決して好き勝手な眞似をやりたくつてやつたのではない、解つて呉れる？」

間をおいて

「私、あなたにだけは卑しい猥な女だと思つて貰ひたはくない、解つて？」

「解つてゐます。」

「誰が悪いのでもない。」

「それに僕も矢張り姉さんが好きだつた。」

「僕は姉さんに會ひたくて堪まらなくなつて出て來た。」

「然し僕は間違つてゐた。愚にもつかぬ事を追求してゐた。知らないでいゝ事迄知リたがつてゐた。」

「だが、僕も淋し過ぎたからです。」

私は斷續的に饒舌つた。

氣拙い壓迫が二人を異様に緊張さした。そして之以上何にも云へなかつた。

山の、靜かな夜の重々しい沈黙の中に姉と私とは悲痛な努力を暗黙の中に胸と胸とに繰返して、大きな嘆息によつてわづかに壓迫を脱れてゐた。

泣き腫らした姉の眼に一脈の異様な熱があつた。凝視せらるれば凝視せられる程私は居たたまらなかつた。次第に倦怠をさへ覺えた。

——今更どうにもならぬものを——

諦めてしまふ投げやりの回避的な痛さがないでもなかつたが——

その氣味は姉にも見られた。

姉

一つの雰圍氣と云ふものはその中にある物を見て一定の限られた範圍に於いて共鳴させるものである。姉の眼の濕みを滯びた輝が次第にぼやけて來た。

——氣がついたのだ——

さう思つた時私は急に淋しくてやり場のない悲しさに困惑した。冷い理性が正軌に二人を引き戻したのだ。

——反省して、あんなにどきまぎしてゐる——

妬ましい氣持でもあつた。だが最早心意の進轉に反抗も出來なかつた。

私は自分の部屋に戻つて、蒲團を引つかぶつて寝た。

蛾が毎晩のび、と云ふ羽ばたきを覚めた。

死に損つて悶へてゐる。

慘めな刺すやうな音だつた。

(五)

汽車は赤土の山腹を狂じみた汽笛と轟音と煤煙で走つた。だが私の心は汽車と逆の方向に走つてゐた。憂鬱と感傷で汽車の子は私を運んで二つの地點を往復せしめた事も知らないでゐるのだ。赤いにやけた土の色が私の網膜を痙攣せしめた。山裾の單調な一列、薄の土手、重く垂れたシグナル、杉の柵、金ボタンの驛員信玄袋をかついだ鄙の旅客、中國訛りの隣り座席の藝者、そんな一鎖りの事物が私の神経には空虚な夢の世界に思はれた。

「時々、來てね。」

斯う云ひながらふりかかつた髪の毛を撫で上げて、例の赤い腫れぼつたい目に寂しい微笑を見せてくれた姉の顔が私の視野に